



結婚

芹沢光治良

新潮文庫



けつ

こん

定価 220 円

新潮文庫 草72 C

昭和四十七年二月二十九日 発行
昭和五十四年五月三十日 十一刷

著者 芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(03)(266)五一一
編集部(03)(266)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛へ送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

結 婚

芹沢光治良著



結

婚

前書

これは、或る親しい夫人の書簡の一節である。

先生は早見年子さんのことを心配していられましたが、先日こちらへお訪ね下すって、女学生の昔にかえったように愉しく三四日ともに暮しました。

参りました翌日でしたが、昼がすむとすぐ、庭へ寝椅子をならべて、仰臥しながら話しはじめ、年子さんのお話がおわった時には、陽が浅間山の横にすんでおりました。先生も先年おこし下すって、ほめられた庭で、幅一間もない清流をへだてて落葉松の林になり、すいすいのびた落葉松の幹をとおして浅間山の全貌が仰げるのですが、それはよく晴れた夕で、夕焼がきれいに浅間山も全身を赤紫にそめて、高原も林も私達の顔まであかく映えておりました。

年子さんは寝椅子に上半身をおこしながら、その美しい夕にうたれたものか、こんな景色を先生にお見せしたいと、突然申しました。私はそれより、年子さんがお話になったことを、先生に聞いていたできたかったと、胸いっぱいでした。先生はご安心なさるばかりでなく、年子さんも只今は原稿を書けずにおりますが、必ず立派な作家になれますことをお感じになるでしょうし……そう思いますと、年子さんのお話になったことを綴って、先生にお目につけないでいられなくなりました。

第一章

一

……昭和二十×年三月二十五日のこと、私はいそいで母校の聖浄女学院へ行った。卒業式の日、親しい仲間が、誰いうともなく、

「戦争がおわったら、この卒業式の日を忘れないで、三月二十五日に、おみ堂の前に必ず集りましょうね」といいあって別れたことを思い出したから。

卒業式はうれしいような悲しいような、感傷にみんな手を握りあって、将来についていろんな約束をしたが、おみ堂の前に三月二十五日の午後一時までに集るということは、そのうち最も現実的で実行可能な約束であった。

私の卒業したのは、昭和十七年で、卒業式のころには、ラングーンは陥落し、ジャバ全島も占領していたので、戦争も日本の勝利のうちに遠からずおわるものとのんきにきめこんで、そんな暢気な約束をしあったのであるが、しかし、省みればあれから四年、十年も二十年もの苦勞をし

たようでもあり、一瞬の悪夢だったようでもあり、戦がおわったというので目がさめると、国をあげて不幸のうずまきこまれていたような有様——昔の仲間は無事だったろうかと、自分のまわりを見まわすようにして母校へ出向いたのだった。

聖浄女学院は省線A駅から十五六分のところにある。A駅の時計は一時半をまわっていた。私は初等科から十一年間かよった道をかけるようにしたが、あの辺の住宅地も一帯に戦災にあつて荒れはてて、見なれない通りのようだった。しばらく行つて、右に坂をあがると、古いみごとな桜並木にかかるが、桜並木は焼けずに、薔がほころびかけていた。

その桜の蔭^{かげ}をあたふたかけるように行つて、学校の方から、森川はる子さんと五井良子さんが来るのに、ぱったり行きあつた。はる子さんは紺がすりのモンペイ姿で、肥^{ふと}つて、その瞬間森川さんとは思えなかつたが、五井さんは相かわらずおひい様で、ぴったり身についたタイユールに赤のハイヒールといういでたちで、にこやかに微笑していた。私はとっさに言葉がでなかつたが、はる子さんは、

「やっぱりネンチャンの遅刻はなおんないのね」と、あだ名で呼んで、私の両手をしっかり握つて笑つた。

「みんなは？」

「みんなって、これだけよ。変り者の三人しか約束を守らないのよ。つまんない」
「へえ、そんなら、ゆうべみんなに電話するんだつた」

「電話って、あるのはあんたのこと、五井さんぐらいよ。あとは焼けたり、お嫁さんになっちゃまって……グループのうちで、この三人が仲間外れだったから、いつまでも友情にあついのね。でもいいわ。これから三国同盟をむすべ……」

「で、どうするの、これから」

「スバル座へ行こうといつてたところよ、五井さんが招待券があつて……五井さんとこ、大株主だから——」

「その前に学校をのぞかせて……卒業してから一度も来たことがないから——」

そこで学校へひきかえすことにしたが、はる子さんは情報官とあだ名されたとおり、みちみち、「タッチンは三月十日の空襲に爆死したのよ、知ってる？ お鈴もおとしの秋、海軍大尉と結婚したが、三か月後に未亡人になったって……ガンチャンは科学者と結婚したので今も円満だそうだけれど、野田さんは疎開地から帰ったが、家がなくて伯母さんの処へ同居で、あの大きなからだを縮めているそうよ」という風に、十二人のグループの噂をさかんにするが、私ははる子さんのいわゆる三人の変わり者である自分たちのことを考えていた。

はる子さんは赤坂の大きな待合の養女であつたので、仲間からもそれとなく軽蔑せられていた。五井さんは有名な大財閥の令嬢で、卒業する日まで、毎日爺やが学用品をささげもつて学校へ送り迎えしていたので、仲間から敬遠せられた。私は作家になりたいというような大それた夢をいだいていたからか、みんなから変人扱いされた。それ故、三人はグループのなかでもしぜんに三

人かたまるのが常だった。

はる子さんは待合の養女として家をつぐのがいやで、保母さんになりたいと切な希望を持っていたが、伯母さんである養母がゆるさなかった。五井さんは又、洋画を専門にしたかったが、ゆるされずに、家門の重圧にあえいでいた。二人とも、そうした不幸を私にだけ泡を吐くようにうちあけて、いつも自ら慰めていたが、赤坂の待合が戦災にあつて、はる子さんは身軽になったのではなからうか、それ故に、こんなに肥つて、はしゃいでいるのではなからうか、五井さんもまた、屋敷はやけるし、財閥は解体するというから、ふだん富豪であることが人間性をころして不幸だとかこつていたが、やっと解放せられたように喜んでゐるのではなからうか、しかし、五井さんは微笑をたたえているがとりすましていて、心を感じさせない。

聖浄女学院はコンクリートの校舎の一部と講堂をのこして、焼けていた。親しい者同志でお祈りに行ったおみ堂も、異国の尼さん達が頭に純白の帆のような帽子をかぶつて、黒の法服で控えていた修道室も、気分のすぐれない時に休息させてもらった博愛病室も、みんな焼けて、運動場がばかに広くなったように、ぼんやり私は立ちつくした。

「もう充分見たでしょう。帰ろうっと……マスール（先生）方に見つかつて復興の寄附金はおさめましたかなんていわれたら大変よ」と、はる子さんが肩をたたいた。

「学校もたいへんね、マメール（校長）がお気の毒だわ」

「侍せなのはあんただけよ、焼けなかったり……せいぜい寄附なさい」

「幸運だったけれど……倖せではないのよ」と、ふとはる子さんにいって、あわてて言葉をのんだ。

出がけに家にあつた事件を、うかつに話してしまいかねなかつたから。私はそれまでも家の不幸を誰にも語つたことがなかつた。これは私の幸不幸にかかわりはあるが、結局は両親の不幸であつて、他人に語つては、両親の恥辱であると考えられたから。しかし、今日の出来事は私の胸にしまつておけないような衝撃をうけた。

「早見さん、小指どうなさつたの」と、五井さんがはじめていった。

「これ——」と、私は左の小指から手にした白いほうたいを見て、言葉につまつた。

その時、私の胸のなかには、あの女のために、こんなかたわにまでなつたのにと、憤いまいがこみ上げて、涙ぐみそうになつたが、誰にもいっていただけやうそがやつといえた。

「これ、疎開荷物の荷造りしていた時に、一節おとしちまつたの」

「まあ、痛かつたでしょう」

「一節おとしまつた、あんた、そそっかしいわねえ」と、はる子さんと五井さんは言葉をそろえて、私の顔を見たが、私には眼前にあの女の顔がうかんでならなかつた。

二

その日、早昼にして、私が外出することにしていたので、母は午前中に午後の仕事をしておく

といつて、隣組の購入通帳をあつめて町会事務所から配給所へ出かけた。父は珍しく朝から弁当持参で、夕方であれば帰らない筈だった。昼近くなつても母がもどらないので、家を留守にもできないし、一時までに学校に行けるか、じりじりしていた。その時玄関にベルが鳴って、母であらうととんで出ると、三十歳ばかりのみぎれいな婦人が四五歳の坊やと立っていた。

「お父さまはいらっしゃいますか」

「父ですか、父は夕方であれば帰りませんけれど——」

「それなら待たしてもらいますよ」

見知らない婦人は、すぐにでも上りそうにするので、私はあわてて、

「あの、どなた様でしょうか」と、たずねたが、

「内藤新子です」と、聞いたとたん、あああの父の女だなど、私のからだは、女があがるのをさも防ごうとするかのように三和土たたくにおりたつて、

「あたし、おあげしていいか分りませんの、母を呼んで参りますから」と、いうが早いか外へとび出していった。

あの女がついに家に来た、あの女がと、全身の血が叫んでいるようで、的まもなく、ともかく町会事務所の方へどんどん坂をかけおりて行ったが、坂下の煙草屋の店先で、母はおかみさんと立話をしていた。私のけんまくに驚いたのであろう、母はすぐ話をやめて私の方へ来たが、

「お母さま、落着いて下さい、ね、お母さま」と、せきこみながら、私自身が落着かないで、ふ

るえていた。

「どうしたの、年子」と、母は笑顔えがほを向けたが、この数年間、私の家をかけにあって苦しめどおした女が、ついに私達の前にあらわれたことを、どんな風に話していいか、私は、お母さま落着いて下さいよと、相変らず繰返していた。

「おかしな人だね、どうしたのさ」

「うん、あの人が来たの、うちへ、内藤新子が……子供をつれて」と、つばをのみこんだ。

母はふと目を閉じて、よろめきそうであったが、そうかい、そうかいと呟つぶやいていた。

「ね、落着きましようね」と、私は涙ぐみながら、自分にそっくりいかせていたのであるが、「お父さまは夕方でなければ、もどらないという」と、待たしてもらいますと答えて、上ったらしいの」と、話しながら、母がどんな風にその女に対すべきか、考える余裕があるようにと、わざと遠廻りをして家へもどりながら、私は母に失礼だとは気付かず必死になって話しつつづけていた。

「お母さまも、その人に初めてでしよう、落着いた立派な態度をとらなければ、お母さまの恥よ。その人がどんなにいやな女でも、お母さまがその人のレベルまで精神をさげたら、お母さまが負けよ。お母さまは二十年も和歌を詠よんで来たんですもの、その和歌の精神を、今こそ發揮してね。……」

母はかつてこの女の問題でヒステリーをおこして、私を驚愕きょうがくさせたことがあるので、私は母が

この女をまのあたり見て倒れるようなことがあったらどうしようか、内心恐怖をいだいたのだ。た。

母は私のいうことには何も答えずに、どんどん歩いた。その無言なのが、私は不安で、家の前に出ると自然に足がふるえた。母は玄関前の石段を大またでのぼったが、しかし、玄関の三和土には、その婦人の姿はなく、履物もなかった。母はほんやり三和土に佇んでいたが、私はすぐ家へあがってみたが、どこにも婦人はいなかった。

「近所をうろろろしてはいないか、見て来て下さい。いたら家へおつれしてね。近所をうろろろつられたら恥さらしですからね」

母がそういうので、いそいで家の横のろじを行って見たが、見あたりなかった。念のために今来たばかりの家の前の路みちを行ったが、いなかった。家へもどると、母は家の前や裏の庭へ出て、物置までのぞいていた。

結

「年子はほんとうに見たんですね」

「たしかに内藤新子と違ってたわ」

「そんな大きな声を出して、お隣へ聞えますよ。あんたは支度したして早く出かけなさい」と、母自身大きながった声であった。

おぼけのような女だと、私は憤りにもえながら、一時に遅刻しそうなので、昼食せずに出かけることにしたが、母は、

婚

「駅の方にいたら、待ってるから家へ来るようにいって下さい、きつと駅でお父さんを待ってま
すよ」といった。

「お母さまが応対なさるの」

「お茶ぐらい差上げなけりゃならんでしょう」

これなら安心だと、何かほっとして家を出たが、その婦人は駅にもいなかった。しかし、あの婦人が子供をつれて、家へのりこんで来たのでは、何かよくない事件が家に起きるにちがいないと、私は不安でならなかった。

はる子さんと五井さんは学校からスバル座へ誘ってくれたが、私はためらった。母が一人の処へ婦人が来ているのではなからうか、母はあんな風に落着いていたが、いざその婦人や父の子だというあの子供を見れば、いつものくせで急に血が頭にのぼって、かっとして、はずかしいことになりはしないか、そう思うと、せっかく会った友達ともゆっくり話してられない気持だった。五井さんは、今度移った家がせまくて、気がらくだからといって、神武天皇祭にはる子さんと招いてくれたから、くわしい話はその時として、二人にはA駅で別れて、私は急いで家へひきかえした。

三

私が内藤新子という人の存在を知ったのは、女学校の五年の秋のことである。その頃橋川へか